

---

# 幼馴染みは予測不能

クレッシエンド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼馴染みは予測不能

### 【Nコード】

N2957E

### 【作者名】

クレッシェンド

### 【あらすじ】

海斗の幼馴染みである麗奈は、超美少女なのに彼氏をつくったことがない。海斗は、彼女が欲しいのだが、海斗と麗奈は付き合っているという小学生からの噂？のおかげで彼女ができたことのない不幸？な少年の物語！

## 勘違いは、ほどほどに

俺の名前は三上海斗<sup>みかみかいと</sup>

今、俺は帰りのホームルームをぶつちぎり、体育館裏に向かっている。

ベタといえばベタだがそんなことは関係ない、勇気を振り絞って俺の下駄箱に手紙を入れてくれた女の子に為、そして何より俺の為に足早に体育館裏に向かった。

俺が着いた頃には、既に女の子は待っていた。可愛らしく大人しそうな印象をうけた。

「あの〜、手紙をくれた優子さんですよね」

彼女は、恥ずかしいそうに顔を赤くし小さく頷いた。

「……………」

「……………」

沈黙…

まずい、何か話さないと、チクショー、こんなときどうすれば…

「あの…お話があります」

つ、ついに来るか、俺は心の動揺を悟られないように振る舞った。

「私、入学式であなたに一目惚れしたんです。あなたが好きです」

「ありがとう。俺で良かったら付き合っ……」

「いいんです、無理しなくても。」

「えっ？」

「私知ってるんです。海斗さんと麗奈さんが付き合ってること」

きたー！ 今まで何回も経験してきた、この勘違いの嵐、いや、今度こそは誤解を説いてみせる。

「ちがうんだ、優子さん。俺と麗奈は何も……」

「いいんです。私は気持ちを伝えられたら、それに転校するし……」

再び俺のことばは彼女に遮られた。全くこの子は、人の話を聞かないな！……

「えっ？転校？」

「はい。親の都合でなんですけど……でも転校してしまう前に言わないと後悔すると思っただんです！」

なぜか、彼女は達成感に溢れた顔をしていた。嫌な予感がする……

「これで、思い残すこともありません。本当にありがとうございましたー！」

彼女は、そう言うと足早に俺の前から去って行った。俺は何とも言えない敗北感を味わいながら体育館裏を重い足取りで後にした。俺は、教室に戻ることもなく、校門に向かっていた。

「どうだった？海斗。」

「惨劇だ！いや悲劇だった」

ちなみに、今俺に話しかけてきたのは、ガキの頃からの腐れ縁である、やまだたかし山田隆である。

「そうか、そうか、そりゃ残念だったな！」

「残念だと思っなら、なんでそんなに嬉しそうなんだ？」

「おい！馬鹿言っな。俺が親友の不幸をわらうとでも？」

明らかにさつき、笑ってたけどな。

「まあいいや、帰ろうぜ！」俺と隆はいつもの他愛のない話しをしながら帰った。

「じゃあな！たかし！」

「おう！明日な！」

俺たちは、いつも通りの別れ道で別れた。

「はあ…」

何だか無意識に溜め息が出てしまった。高校に入ってから初めてだったからな…

「はあ…」

「何か落ち込むことでもあったの？」

「ああ、実はさあ、今日体育館裏でって、うわあああ！！！！！！」

「な、何よ！ そんなに驚くことないじゃない！」

「何だ、麗奈か… 脅かすなよ！」

ほつじみやつれいな  
北条麗奈

俺の幼馴染みで、そして腐れ縁。

俺が小2のときこっちに引越して来たときからのつきあいだから、かれこれ、10年くらいになる。

麗奈の親は、大会社を経営しており、麗奈は、かなりのお嬢様である、しかも容姿は、いま芸能界で活躍している女優たちと比べても、麗奈が勝つんじゃないかとおもっほどだし、実際何回もスカウトされたことがあるらしい。勉強は、常に学校ですっとトップクラスだったし、自分の身を守るためとか言っつて空手は、かなりの腕前だし、簡単にまとめると超人である。

「で、何でこんなところにいたんだよ？ もしかして待ってた？」

「そんなわけないでしょ！ たまたまよ！ たまたま！」

「まあ、そうだろうなあ……」

麗奈の性格上、それはないよな！ こいつワガママだしな……

そんなわけことを思いながら、しばらく無言で歩いていると、俺も昔から知っている、桜ヶ丘公園の前で急に麗奈が立ち止まった。

「おい、麗奈、どうした？」

「ねえ、ちょっと公園寄っていかない？」

「ん？ ああ別にいいけど！」

俺は、特に断る理由もなかったので、従った。

「……………」

「……………」

俺と麗奈は、ベンチにすわり、暫く無言を続けていた。

「ねえ、今日、告白されたんでしょ？」

いつもとちがい、真剣な表情をする麗奈に俺は、戸惑いを隠しきれないでいた。「え、いや、その……」

俺は、何だか上手く言えなくて、言葉にならなかった。

「ちょっと、はっきりしなさいよ！」

取り調べのような、この状況に、俺は耐えられず、とうとう口を割った。

「そつだよ、告白されたけど！何でお前が知ってるんだよ？」

「別にいいじゃない！ それより…」

全然よくないけどな。今は黙っておくことにした。

「つ、付き合っの？」

やはり、そつきたか、っていうか、声ちっちゃ！聞き取るのがやっつだった。しかも何か俯いてるし…

「いや…転校するから、その前に気持ち伝えに来ただけだってさ…」

「そつ…」

麗奈は立ち上がると、そのまま公園の出口に向かっていった。

「お、おい麗奈！」

麗奈は振り返って笑顔で、舌を出し、こう言った。

「何だかんだで、彼女できないね！海斗は！」

何か嬉しそつだな、と思いつつ、俺とお前が付き合ってる噂があるからだから！とは言えない俺であった。

勘違いは、ほどほどに（後書き）

初めての投稿なので、読みづらいと思いますが、感想など、頂けると嬉しいです。

## 勉強も、ほどほどに

俺と麗奈は、公園からでたあと、そのまま寄り道することなく家に向かっていた。

「海斗！今年もあれやるわよ！」

「……………」

「何よ！この沈黙は？」

麗奈が不機嫌そうに聞いてくる。

あれっって言われても色々ありすぎて絞れない。よし！ここは俺の勘にたよろう！

「わかってるよ！あれだろ！ほら、毎年皆で行ってるプール…じゃなくて…」

途中、麗奈に鋭く睨まれた瞬間、ピンときた。ちがう、麗奈の言ってるアレは、わからんが、プールではないことは確かだ。そういえばプールは、中2のときを最後に行ってないんだった。危なかった…危うく地雷を踏むところだった。

さて、あっ！きたぞ！これしかない！

「あれだ、そう…」

「もういいわー！」

あ〜！ せっかくわかったのに………待てよ、ここで下手に間違ったことをいうよりも、麗奈に言わした方が無難。 触らぬ神に祟りなし！

俺は、麗奈が言い出すのを待つ作戦にした。

「……勉強会よ！勉強会！」

「ああああ……！！！！！！」

俺は人目も気にせず思わず大声をあげてしまった。

「ちよつとそんな大声ださないでよね！恥ずかしいわね！馬鹿じゃないの？」

いや、今のお前の方が声大きいから！だけでもちろん口には出さない。そしてさりげなく話題を変える。

「ところでさあ、お前、卒業したらどうするの？」 「はあ？いきなり何よ！私たちまだ1年でしようが……！」

「そりゃそうだけど、ほら、就職とか、大学とか、そのへんは考えてるんだらう？」

俺にとっては、人生を左右する問題に発展するため、ここは何としても聞いておきたい。「まあ、いいわ！答えてあげる。まだ決定してわけじゃないけど、東武大学に行こうかなと思ってるわ！」

東武大学といえば、日本で3本の指に入る大学だ。 頭の良さは桁違

いである。これはさすがに…

「麗奈！大切な話がある！」

「な、何よ！急に！」

麗奈が、驚いてこちらを見ている。

「今まで中学、高校と俺に勉強を教えてくれてありがとう」

「何よ！いきなり？」

本当は、感謝などしていない！まだ俺の意図がわかってないみたいだな。

「さすがに東武大学は無理だ！俺は、別の大学に行くから、もう勉強会は、必要な、な、な……」

言えない！鬼のような形相で睨む麗奈のまえに…くそ、勇気だせ俺！

「何か、勘違いしてない？確かに今のままじゃ無理だわ！」

おっと、まさかこの展開は、俺がもつとも恐れている……

「勉強を教える回数を増やすわ！」

きたー！！やっぱりこうなったか、だが、まだ諦めるのは早い。

「俺、中学、高校、金かかってねえもん、大学行く金はあるはずだ」

あれ、麗奈が悲しそうな顔してる？勝ったぞー！！

「知らないのね！香織さんが、新しい車を買ったってこと！！」

「なにー！！！！」

嫌な予感がする。ちなみに、香織さんとは俺の母さんである。

「香織さん、言ってたわ。海斗は大学も特待生で行くから、お金がかからなくて助かるわーって」

麗奈がニツコリ笑いながら言った。俺には、悪魔に見えた。

「何か言うことは？」

麗奈は勝ち誇ったような笑みを俺に向けてくる。

「次の勉強回いつやる？」

負けた！今冷静になってみると、初めから勝ち目はない。そういえば高校の時も同じような事を言って全面敗北したのを忘れていた。

さらば、俺の自由！これから4年間…4年間？ちよつとまでよ！今、高校1年生だから…

考えるのは、また今度にしよう。あー！何か俺今なら10秒以内に泣ける気がする

あれ？ここで違和感を俺は感じた！

「麗奈！お前の家もう過ぎてないか？」

「ええ、今頃きづいたの？」

いやいや、もうすぐ俺ん家じゃん！ていうかまさか、行きなり勉強を教えにきたんじゃ？

「なあ、まさかとは思っけど、いきなり、勉強を教えに俺ん家くるの」

「ちがうわ、今日言って今日すぐ教えに行くわけないじゃない！子供じゃないんだから！」

「いや、ごめん。さすがにそれはないよな。悪かった。」

「別にいいわよ」

ふうー！よかった。今日は、これでゆっくり…いや、念のため聞いておこう！

「そっいや、何で、俺ん家の方来てんの？買い物とか？」

「違うわ！舞ちゃんに勉強教えてくれないか？ってたのまれてから家庭教師になってあげようと思ってね！」

我が妹のばかー！！！！と俺は心のなかで叫んだ。

勉強も、ほどほどに（後書き）

まだまだ未熟者ですが、感想など頂けると嬉しいです。

## 憂鬱な気持ちは、ほどほどに

俺は、憂鬱な気持ちでドアノブに手を掛けた。

「ただいま」

「あらー！おかえりって麗奈ちゃんじゃない！いらっしやい」

「お邪魔しますー！」

俺の憂鬱な気持ちも知らないで、元気に挨拶したのが俺の母親の三み上かみかおり香織だ。

母さんと麗奈は、かなり仲がよく、俺と麗奈がもめると確実に麗奈の味方になる。俺の家だからといって調子に乗ると麗奈と母さんが俺の前に立ちほだかる。

ま、怒らせなきゃいいんだけどな！

「あれー？海斗、帰ってきたの？」

この兄を兄とも思わない発言。俺の妹の三上みかみまい舞だ。

「おい！なぜ今日麗奈に家庭教師を頼んだ？そういうことは、前もって俺に言えよ！」

「何で海斗に言っとかなきゃいけないの？」

くっ！言えない、前もってわかっていれば、学校帰りに寄り道して

ちょうど麗奈が帰る頃に行き違いで家に帰るためなんて！後ろに麗奈もいるし、この状況を打開する策は、1つしかない。

「母さん！メシまだあー？」

「もう、そろそろよ！こっちに来て食べなさい！」

ナイス母さん、これでごまかせる。

「はい」

「わかった！今いく！」

2人は、揃ってリビングに向かっていった。

よし、今回は、平和に終わらしてみせる！強い決意でリビングに向かった。

「麗奈ちゃん、高校生になってまた1段と綺麗になったわね」

夕食中、まあほとんど母さんがしゃべっている状態だ。

大体高校生になって1段と綺麗になった？いやいや、まだ高校生になって1ヶ月だからな！

「海斗、あんたまさかまだ高校生になって1ヶ月しかたっていないからそう変わってない！とか思ってたんじゃないでしょうね？」

なぜ？俺の思っていることが分かるんだ？まさか読心術……ないな！そんなことはない。

「そんなこと思っでないよ、ただ…」

横に座っている舞が、俺をつんつんと指で、つついてきた。

何かと思っでみて見ると舞の手には、紙が握られており、そこに書かれてある文字を読み取ることができた。…結論、そんなこと言えねえよ！大体麗奈だつてさほど気にせず飯くつて…ないな。箸は止まり俺を見つめてる！というのは、いい解釈で実際は睨んでるな！確実に。俺は、今一度舞が持っている紙に目をおす。よし、この紙は無視してと！

「でも、1ヶ月しかたつてないのに随分大人っぽくなつたよ麗奈は」  
「！」

どうだ！これが俺の導きだした答えだ！

麗奈は、止めていた箸を動かし再び食べはじめた。

「ありがとう！」

非常に小さい声だったが、俺はしっかりと聞き取つた。なんだ、可愛いところあるじゃん！と思ひながら夕飯を食べた。「それじゃあ、俺は風呂入るからな！」

そう宣言して立ち上がった。

「あ、出たら言つて私入るから！」

あれ？嫌な予感が…まさか

「泊まるの？」

「悪い？外見てみなよ！」

何だよ！外つて嵐か、雷か、麗奈の帰路を邪魔する輩は、俺が、叩き潰してやる！

俺は、玄関のドアを開け、外の様子をみた。なるほどね、このまま外に出れば、俺は、叩き潰される。外は、大嵐であった。こんな状態で麗奈を帰すわけには、いかん。俺は、現状を受け入れリビングに戻った。麗奈は、ソファーに座ってテレビを見ていたが、俺に気づくと黙って見つめてきた。

「風呂でたら、呼びに行くわ」

「わかった」

そう言うと再び麗奈はテレビを見だした。

俺は、そのまま風呂場へ向かおうとした。

「待って！」

麗奈に呼び止められた。

「あなた、明日暇？」

こつきたか？だが、甘かったようだな！ここは断固として譲らん。

「あー！悪いけど明日用事が……」

「無いわ!」

馬鹿やろう!舞、だが、こればかりはプライベートだ。お前とて分かるはずが…

「昨日言ってたよね!今週末暇だつてさ!」

やられたよ舞!いつの間にこんなに憎たらしく…おつと間違えた。強くなつたんだな。

「で、あんた明日暇なの?」

俺は思いつきり麗奈に言つてやった。

「全然暇!」

俺は風呂の中で考えていた、恐らく明日連れ出されるだろう!そう  
だ明日も嵐が、続く…わけないな、もう期待するのは、やめよう!  
よし!風呂出たらいち早く布団に入り現実逃避をしよう、決めた  
俺であつた!

## 恋の話は、ほやほやに

「ふうー!」

今日も何だか、色々あったが、こうしてゆっくり風呂に入ると何だか、どうでも良くなってくる。

「海斗ー! ちょっといい?」

まったく舞の奴、俺の癒しの時間を邪魔しやがって。

「何だよ?一緒に風呂でも入りたいのか?」

こう、軽くからかってやれば、舞も慌てるだろう。

「何言ってるのよ!そんなわけ無いでしょ!」

この瞬間、俺と舞は、ぼつちり目があった。なぜなら、舞が風呂の扉を開けたからだ。

「ちょっとやめてよ!」

舞が、顔を真っ赤にしながら扉を勢いよく閉めた。

やめてよ!ってこっちのセリフだろうが!と言ってやりたかったが、ここは兄として大人な対応にすることにした。

「悪かった。所で何だよ、急に?」

「そうよ、海斗のせいで言つの忘れちゃってたじゃない」

その人に責任を押し付ける性格…どっかの政治家みたいだな。

「勉強でわからないところがあつて、教えてほしいのよ」

まあ、その言い方は、人に物を頼む態度じゃないが、それよりもまず、麗奈が居るのに…

「麗奈が、居るだろ！俺なんかよりあいつの方が、頭いいだろ！」

「…数学…数学なの」

なるほど、全ての謎が解けたぞ。全教科のテストをほぼ満点をとっている麗奈だが、1つ秘密がある。それは…昔から数学だけは、苦手で俺が教えているという事だ。

俺は、というと数学だけは、まったく勉強しなくても満点を取れる。昔から数学だけは、得意だったからな！仕方ない、ここは、引き受けよう！

「わかった！風呂でたら、お前の部屋行くから待ってる」

「ん、わかった」

そう、返事をする、舞は、自分の部屋に戻って行った。

はあー！めんどくさい、さっさと教えてパパッと寝るか！

でも、明日になれば、麗奈にどこに連れて行かれるかわからん。…  
まあ、なるようになるか、いや、なつてほしい！いや、なつてく  
ださい！ 誰かは、分からないが、なんか神様のな人に俺の切実な願  
いを祈り、何か知らんが、こんだけ、祈れば大丈夫という根拠のな  
い自信を得て、俺は風呂を出た。

俺は、めんどくさかったので髪の毛乾かさずに舞の部屋に向かっ  
た。

「あ、海斗！ やつときたの？ ちょっと髪の毛乾かしてないの」

あーあ！ だらしないなあ！ という目線を俺に向ける。髪の毛乾か  
さず、妹のために一刻も早くきた！ という考えは、できないのかお  
前は！

「わかった！ それなら、髪の毛乾かしてそのまま寝かしてもらっわ」

「何言ってるの？ 数学は、あんたが一番分かるんだから、あんたが  
教えるしかないでしょうが、拗ねてないでここに座りなさい」

麗奈が、自分の座っている隣をポンポンと叩いている。あそこに座  
れてことか、ここで反論したらガキみたいだし、ここは、大人し  
く従おう。俺は、麗奈の隣に座った。俺が座ると何故か麗奈が俺と  
は、反対側に顔を向けた。え？ 機嫌悪！ 一体なにが？

「パジャ、…タン…閉め…」

麗奈が、何を言ってるのか、全く聞き取れん…

「おい、一体何が？…」

「だから、パジャマの前のボタンを閉めなさいよ!!」

おっと麗奈が言ったのは、これか、麗奈はだらしのないの嫌いだもんな。我慢できなかったのだろう。

「悪い、お前そういうならしないの嫌いだもんな!」

「はあー!」

舞がため息? しまった、まさか気づかないうちに地雷を踏んでいたのか? 麗奈の方を見ると普通に勉強していた。あれ? 怒ってないぞって... じゃあさっさの舞のため息は? まあいいか! さてさっさと教えて終わらしてしまおう。とりあえず一通り問題は解いたらしく、わからない所は数問しかなかった。しかし、見事に難しい問題ばかり残ったな! まあ、当たり前か! 麗奈だって苦手といっても、それは麗奈の基準であって、普通の奴らと比べたら、できる方である。

「えーと、ここは、3じゃなくて2だ。ここの計算が、間違ってるぞ!」

「あ! 本当だ。でも本当海斗は、数学は、できるよね」

なんだよ! 数学はつとこだけ強調しやがって! あれ? これ! うちの高校の、紅高校の過去問じゃん...

「舞、お前、うちの高校くるのか?」

「今の所、第一志望ってだけ、まだ変わるかもしれないし!」

えーと、今、舞が中2で俺が高1だから…そういうことが、なるべく早く舞の志望校が、変わることを祈ろう。

しばらくして、おれが、一通り問題を解いてしまったので当然、麗奈の役目もなくなり、お互い暇になってしまった。居づらい、そうだが、俺の役目も終わったし、そろそろ、自分の部屋に戻ろう！

「じゃあ、これで、俺は自分の部屋に戻るからな！」

「待って！もしわかんなくなったら聞きたいから、まだいて！」

舞、見てなかったのか？さっさの雰囲気を…よし、いちかばちかアイコンタクトだ。俺は麗奈をじーっと見つめた。（お前からも何とかが言っただけを部屋に帰してくれ）

届け俺の言葉！……………

「なに、さっきから、じろじろみてんのよ！気持ち悪いわね！さっさとここに座りなさいよ！」

さっき、あんなに気まずかったのに、再びあれを繰り返すのか…あ、麗奈が、睨んでる！俺は、大人しくさっき座っていた場所に戻った。カリカリカリカリカリ！

「……………」

「……………」

ひたすら、シャーペンの音しか、聞こえない。やっぱり、こうなったか、俺と麗奈は、しばらく無言のままだ。

「……………」

ドン！……！舞がいきなり机をたたきやがった。何なんだよ！

「なんで、二人とも、黙ってるのよ！」

いや、だって改めて話すって言ったって…

「別にこれと言って話すことないよな、麗奈？」

「……………」

あれ？無視？まさか、俺間違ったことを言ったのか？

「話題は、私が決める、テーマはずはり、好きな人よ！」

うおおおー！わけわかんねえよ！ばか舞！

「麗奈、お前から、ガツンと叱ってくれ！これは、兄として頼む

「……………」

あれ？再び無視？今俺と麗奈、味方じゃないのか？

「……………」

「……………」

また、気まずいな、一体どうしたら…ううー

何か知らないけど、麗奈めっちゃ、こっち見てる！なんとか、この

空気を変えなければ！

「麗奈、あの…」

「海斗、あんた好きな人いるの？」

しまった！麗奈は、舞の意見に賛成だったのか！ひとまず、戦線離脱！

「俺、お茶持ってくるわ」

勢いよく、立ち上がりドアを目指す！その瞬間、麗奈に腕をつかまれ、無言で座らされた！そうか、最初から、無理だったんだな。俺は逃げるのをあきらめ、自分の運命を受け入れることにした。

恋の話は、ほやほやに（後書き）

感想など頂けると嬉しいです。

## 朝早いのは、ほむほむ

「……………」

「……………」

この状態！さつさの軽く3倍くらいは、気まずいな！しかも、舞に至っては、もう勉強してねえし！しかも、めっちゃ二人とも俺のと睨んでるなあ…っていうか、勉強は？舞！勉強しないなら、俺は帰るぞ！…なんて言えるわけなく、あるかどうかわからない黙秘権を行使することにした。

「……………」

「いいかげん、こたえなさいよおおお！！」

麗奈が、俺の胸ぐらを掴んで叫んだ！ああ！俺これからどうなるの？

「ちよつと、麗姉、落ち着いて！ね！」

おお！舞、さすが、持つべき物は、空気を読む妹だな！ちなみに舞は、麗奈のことを麗姉と呼んでいる。舞に言われ、渋々といった感じで俺の胸ぐらから手を放した麗奈は、かなり不機嫌になり、不機嫌オーラをだしている。残念だったな、いくら舞と仲が良いとはいえ、しよせん他人！兄弟の絆には、勝てまい！

「じゃあ、海斗、麗姉も落ち着いたから、さつさと言っちゃいなさい」

舞！！！寝返ったな！いや、まてよ、今まで、こいつが、俺の味方になったことは……結構、記憶をさかのぼってみただ、俺の記憶では、常に麗奈側だったな！ここは……もう、降伏しよう。お前らには、負けたよ、最凶コンビ！！！！

「えーと、好きな人だったな！でも俺の好きな人知ってどうするの？」

「そうね、あんたなんかじゃあ、その子は、無理ね！って大笑いしてやるためよ！」

動機が、めっちゃくちやだな！そんなこと言われたら、例え幼稚園児でも口を割らないだろう！

「はああああ！！！」

また、ため息かよ！いい加減態度じゃなくて言葉で伝えてくれって！まったく！だが、舞は、遠慮などせず、言いたいことをしかも、はっきり言う奴だ！それは、間違いない！なら舞が、言わない理由は、1つ、舞の発言により、この場に何らかの障害が生じる！それしかない！なら俺は、舞のため息に気づかないふりをする！それしかない！

「ちょっと、何黙ってんのよ！」

おっと、麗奈の不機嫌さが、最高潮に達していた！限界だ。答えるしか道はない！

「えー、今のところ好きな人はいないな！大体、高校入ってまだ1ヶ月だろ？まだ、どんな子が、いるかとかもわかんねえし！」

「ふーん、そう！」

あれだけ聞きたがっていて、何？この反応？それと少しの敗北感：

大体俺の好きな人は、お前らに関係ないだろうが！こいつらの考え  
てることは、俺には、予測不能だ。

「じゃあ、次は、麗姉の番ね？」

「えええええ！こ、ここで、言うの？」

おいおい、人に催促しといてその動揺のしかたは、無いんじゃない  
の？落ち着け麗奈、これは、皆が、通る道だ！まあ俺の知る限りで  
は、俺だけだから…おめでとう！お前が2人目だ！

「そうよ、ここで、言うのよ！まずは、好きなひとからね！」

おっ、舞！俺には、今のお前の笑顔が、どうしても、悪魔の邪悪な  
笑みにしか、見えん。まあいい！今、追い詰められてるのは、おれ  
じゃないしな！

「早いとこ、言っちゃまえ！楽になるぞ！」

「お前は黙ってる！」

いかん、いかん、さつきと立場が入れ替わり、つい軽率な発言をし  
てしまった！以後、気をつけよう！

「……………」

「……………」

また沈黙か、いい加減このパターンもあきてくるな！

「いるわよ！好きな人！」

うお！いきなり言ったな！しかも、そんな大声ださなくても聞こえるのに！よし！ここで麗奈にフオローを入れて、機嫌を直そう！まあ、明日不機嫌な麗奈に連れ回されるのは、きついからな！

「でも、好きな人が、いるなら、何で告白しないんだ？お前だったら、絶対うまくいくって！というか、お前の好きな奴だってお前に惚れてるかもしれないぜ！なんたって、一年で、ミス紅だもんな！」

そう！こいつは、入学式直後、紅高の伝統である、ミスコンを制覇し、ミス紅高に輝いた！ちなみに一年生でのミス紅高は、28年ぶりだと聞いた！完璧だ！ここまで誉めれば、麗奈の機嫌だって良くなるはず……………」

「本当？」

「え？なにが？」

「だから、私が、告白したら、絶対上手くいくって言ったの本当？」

「ああ、本当だって」

やばい！予想以上に機嫌が、悪い！理由は、わかんないけど…

「じゃあ、ここに証拠として書きなさい」

書く？書くって何のために？俺は、一応麗奈の表情を確認してみた！睨んでる！物凄い、勢いで睨んでる！俺は、結局、書くしかなかった！書いた内容はこうだ！

『私、三上海斗は、北条麗奈さんの告白が、上手くいくことを固く保証します』という物だった！何のために書かされたかは、わからないが、さっきよりか、麗奈の機嫌が、良くなったので、良しとするか！

「海斗！数学は、もう終わりにするから、帰っていいわよ！」

まったく！感謝というものをしてないな、舞は！まあ、今に始まったことじゃないし、さっさと部屋に帰るか！

「ちょっと待って海斗！」

部屋を出ようとした所、麗奈に呼び止められた。

「何だよ？」

「今日、すぐに寝なきゃだめよ！」

「な、何で？」

「明日、とっても早く出かけるの！だからよ！」

「……………」

「そういうことだから、おやすみ！」

「お……み」

多分、俺の声は、あいつらに届いていなかっただろう！疲れた足取りで自分の部屋のベッドに入り、必死に明日のいい出来事を想像しようとするのだが、どうしても麗奈に振り回される姿しか思い浮かばない俺であった。

朝早いのは、ほんとほんと(後書き)

読んで頂き、ありがとうございます。感想など頂けると嬉しいです。

待ち合わせ場所は、ほとんど

「…はや…き…い…」

何だよ！今、俺は眠いんだ！ほつといてくれ！

「は…く…さ…い！」

白菜？何？訳わかんねえよ！八百屋なら、他を当たってくれってんだ！まったく。

「は……………きなさい！」

吐きなさい？それとも履きなさい？まあ、どっちでもいいか、今の俺には、両方とも必要ない言葉だ！それにしても、さっさから、うるさいな！

「早く起きなさいって言ってるでしょ！」

「うるさいな！他を当た…ぐほおおおお！！！！！」

俺の脇腹に強烈な痛みが走った！眠気が一瞬にしてさめ、真っ先に俺の目に飛び込んできたのは、不機嫌オーラをだしている麗奈であった。そうか今、俺は麗奈の右ストレートをもらったってわけか、やっちまった！今回ばかりは、さすがの俺でも打開策が見つからない。

「あんだ、他を当たれ！みたいな事言おうとしてたわよね？」

(ああ！) 違う！こんな返事では、だめだ！(うん！) これも違う！まだ、だめだ！(はい！) 惜しいけど、これも違う！ならば…

「すいませんでした！」

これだああああ！ナイス！チヨイス俺！

「何、謝ってるのよ？私が、あんたと出かけるのに他を当たれって、あんたしか、いないじゃん！早く下に降りてきなさいよね！私はもう、準備出来てるんだから！わかった？馬鹿！」

俺は、もうそりゃあ全力でうなずいたさ！俺が、うなずいたのを見ると麗奈は、一階に降りていった。しょっぱなから幸先わるいな！と思いつつ、俺も一階に降りて行くことにした。リビングに入ると母さんが、

「ふーん ふふーん」と鼻歌を歌っていた。何だよ！あの嬉しそうな顔！それに鼻歌！なんか、良いことあったみたいだな。

「あらー！海斗、おはよう！」

「あ、ああ！おはよう！」

何なんだ？母さんをここまで幸せ気分にする出来事とは？うーん…気になるなあ！とりあえずテーブルの席に着こう！

「ふーん ふーん ふっふーん」

カチッ！よく分からないが、何かのスイッチが俺の中で入った。

「母さん！何でそんなに嬉しそうなの？」

あ！好奇心のスイッチだったのか。

「それはね…秘密」

気になる！…気になる！…気になる！！！！

「母さん！…」

「秘密！」

俺の言葉は、母さんの言葉で遮られ、最後まで言えなかった！もう、これ以上の詮索は、やめにしよう！家を出る時間に影響する。

母さんが作ってくれた朝飯を俺は一人で食べている。

麗奈は、俺が起きるずいぶん前に食べていたらしい。麗奈の早くしろよ！という無言の圧力が俺に、ひしひしと伝わってくる。そんなに睨むなら俺が起きて来るの待って一緒に食べばいいだろうが！でも、こいつが俺に時間を合わせるなんてあり得ねえな！そう自分で納得し、残りの朝飯を全部食べ終わった。

「行つてきます！」

朝飯を食べた後、麗奈と母さんに急かされながら準備をして今、ようやく家を出たところだ。

「なあ、今日どこに行くんだ？」

「とりあえず、桜ヶ丘駅の近くに行くわ！」

なるほど、駅前なら映画館にカラオケ、飲食店など、いろいろある。まあ、あそこなら、問題ないな！

「ところで今日ってなんか、買いたい物とか、あんの？」

「何で？」

「何で？って、それじゃあ俺、何のためについてきたんだよ？」

「別に。理由が、無かったら、あんたを連れだしたら、いけないわけ？」

「……………」

すごい理不尽だが、こんなこと今に始まったことではない。ああ、慣れって怖いな！

しばらく歩くと駅前に遊びに来るときは、目印、もしくは待ち合わせ場所になる、虹色噴水が見えてきた。

虹色と言っくらいだから勿論、虹をモチーフにしたんだろうが、悪いが俺の評価は6.5点だ。まったく虹を、具現化できていない！その一言に尽きる！ふと気づくと麗奈の奴が、虹色噴水に向かって歩いている。

何で？だから虹色噴水は、待ち合わせ場所とかに使われる所で一緒の家から出てきた俺たちには、用事無いでしょ？あーあ！とうとう目の前まで来ちゃったよ。ていうかお前何でそんなにまわりをキョロキョロ見てんの？何か気になるのかよ？俺は、そんなまわりをキョロキョロ見てるお前の行動が1番気になるわ！

「ちょっと行ってくるから、ここで待ってなさい！」

えええええ！どこに？何しに？なぜ今から？そして…俺はなぜここに待機なんだああ？ツッコミどころがありすぎてどこにツッコミをいれればいいのかわかんねえよ…

「いい？わかったわね！もしここから少しでも離れたら…」

シュツ！シュツ！麗奈の右拳が空を切った。相変わらずいいパンチだな！そんなのにやられたらと考えるだけでも恐ろしい！

「もう一回言うわ。ここから絶対離れず、私が来るまで待ってなさい。返事は？」

うるせえ！俺は帰らしてもらつ。と言ったのは心の中だけで実際は、

「…わ、わかった」

こう答えた俺は、いつ来るか分からない麗奈を6.5点と俺が評価している、虹色噴水の前のベンチで待つことになった。

## ナンパは、ほどほどに

俺は今、自分が65点と酷評した虹色噴水の前のベンチに座っている。

なぜか？そんなことは簡単だ。麗奈の理不尽な命令により、俺は、ここで待機するしかない。

めんどくさいから家に帰るなどという選択肢は俺の中には存在しない。なぜなら…そう、あれは中1の頃だった。

麗奈と出かけ、そして今のように理不尽な理由で1人残されていた俺は偶然、親友の隆とばったり会った。

「海斗じゃん！何してんの？買い物？」

「あ、ああ」

麗奈と一緒に来たことは、黙っておこう！その方がいい気がする。

「なら、一緒に買い物しようぜ！」

まずい。麗奈を置いて隆と合流したら、さすがに麗奈が怒るだろう。いや、あいつだって同じことをしてるんだ！後ろめたさを感じることはない。

「ああ、そうしよう」

俺は隆と買い物をすることにした。そしてその夜、我が家の食卓にて悲劇は起こった。

「母さん！俺の晩飯は？俺のハンバーグは？」

1人先に席へと着き、ハンバーグを食べている舞を指して叫んだ！

「今日は、あんたの分は無いわ！」

母さん！そりゃあないだろ！実の息子に。

「何で舞があつて俺には、無いんだよ？」

「自分の胸に手を当てて今日の事を考えてみたら？」

背後から、いつもより低い声で舞に言われた。今日？……………麗奈と  
買い物行つて途中で…ばつくれたんだつた！

「母さん、麗奈、何て言つてた？」

「自分で電話して聞いたら？」

「ああ、そつするよ！」

この後、急いで麗奈に電話したが、その会話の内容は、よく覚えていない。

なぜなら、4時間ぶつ続けて説教を受けた俺は次の日から、1週間インフルエンザで倒れたからだ。

今、思い出すだけでも恐ろしい。

俺は、この事件を『あんたに食わせるハンバーグは無いわ！』事件と呼んでいる。

昔の事を思い出しているとふと素朴な疑問が浮かんだ。ジュース買ったためだったら少しくらい、この場所を離れてもいいよな？

でも、買いに行つてる間に麗奈が来たら…迷う。くそ！このままで

は、らちがあかない。

ならば、コインの表か裏で決めるしかない！表ならジュースを買いに行く。裏なら、ここで待機と決め、俺はコインを投げた。

あ！表だ。わかった！俺は神の意思に従うんだ！という妙な納得感を得て自販機を探して走りだした。

自販機でジュースを買った俺は、まさか、ただか10分程度では麗奈は来ていないだろうと思いつながら虹色噴水に向かった。

やっぱりまだいないよな？辺りを見ながら虹色噴水の周りを確認する。

「へい！姉ちゃん！俺らと遊ばない」

いつの時代のナンパだよ？背後から聞こえてきた声につい反応しそうになっちまった。

「やめてよ！気持ち悪いんだけど！」

あれ？聞き覚えのある声だぞ！まさか…

俺は恐る恐る振り返った。麗奈だあああ！ナンパされてるの。本当は、行きたくないけど、元はと言えば俺がジュース買いに行つてすれ違つたのが原因だし。

「てめえ、調子に乗りやがって！」

「だから連れが、いるって言うてるでしょ？」

「どこにいるんだよ？嘘つきやがって！」

このタイミングだ！俺は麗奈にナンパしている、2人組の男の前に

飛び出した。

「わりい、こいつの連れ、俺なんだ」

「海斗！あんた一体どこ行ってたのよ？」

「わりい！あとで話すから、今は黙っててくれないかな？」

「…わ、わかったわよ」

「おい！俺たちを忘れてんじゃねえよ！その女に馬鹿にされて頭に来てんだよ」

「ああ！俺もだぜ。」

こいつら、馬鹿そうだなあ…よし、

「ねえ、君たち？」

俺は、そう言い、2人の馬鹿そうな男たちの肩に手をかけ、麗奈から少し遠ざけてあいつの耳に俺の声が届かない位置まで移動した！

「なんだ！てめえ！ケンカ売ってんのか？」

さっそく俺は、先ほどひらめいた作戦を実行へと移した。

「そんなつもりないよ。ただ彼女をナンパするにあたっての注意事項を教えようと思ってね」

「あ？注意事項だあ？」

よし！乗ってきたな。

「彼女ね、あんなに言葉遣い悪いけど、凄い金持ちのお嬢様なんだ。」

「何だよ！好都合じゃねえかあ！金持ちなんてよ」

「違うんだ！話は、ここからなんだ。あの人たちを見て！」

何の用で来てるか分からない黒人でスーツを着たSP？的な人おれは指さした。

「何だよ？あいつらが何なんだよ？」

「彼女が、ここから、居なくなったらあの黒人さんたちは、きっと一緒に居なくなるだろうなあ。この意味分かる？」

「な、なんだ？あ、あいつらが、あの女の護衛って言うのかよ！証拠は、あるのか？」

よし！だいぶ、動揺してるな！あと一息だ。

「はあ。なら勝手にしてくれ！だけど、その前に名前だけは教えといてくれ！遺族に連絡するから。」

俺は最高に哀れんだ目で2人を見てやった。すると男2人は、お互い顔を合わせ、何かを確認したようだった。

「何か、悪かったな！迷惑かけちゃって。」

「いや、いいんだ！わかってくれれば」

「ありがとよ！おかげで家族が遺族にならなくてすんだ」

「じゃあ！俺たちは、もう行くぜ。」

「ああ、じゃあな」

男2人組が、去っていく背中を見ていると、つんつん！と背中をつかれた。

「何て言って追い払ったの？」

俺は、正直に答えた。

「嘘に嘘を重ねたんだ」

まあ、やつらを追い払えた1番の理由は、やつらの頭の悪さだった  
がな完全に！

「ふーん、まあいいわ！それより何で、いなかったの？あれほど言  
ったのに」

ピンチ！ここでもまた得意の嘘に嘘を…重ねるのは、やめよう。

「ほんの出来心でジュース買いに行っていました！」

「そう…許せないけど許してあげる。」

いつもなら、問答無用で説教！または制裁！のはずなのにこの妥協した態度。幼馴染みとして長年一緒にいる俺の勘によれば、おそろく…

「許してあげたんだから1つ私の言うこと聞きなさい！」

やはりそうきたか、こいつが無条件で俺を許すなんてあり得ねえもん！多分、めっちゃくちゃな事を言うてくるだろう。覚悟しないと！

「……………」

言えよ！何か言えって！何顔真っ赤にしてうつむいてるんだお前は？

「……………」

「なんだよ？はっきり言えよ！」

「…じゃあ…言うわよ！今日1日、今日1日…私の恋人になりなさい！」

「なんだ、それくらいなら任せと…えええええ？？」

そんな…冗談だよな？あれ？でも今まで見たことないくらい麗奈の顔が真っ赤だ！ってことは…

マジかああああ…！！！！

## ナンパは、ほどほどに(後書き)

読んで頂きありがとうございます。評価、感想など、頂けたら嬉しいです。

## 喫茶店では、ほどほどに

あの後、俺は強引に駅前の喫茶店アポロに連れてこられた。

「まず、説明しろよ！話は、それからだ。」

いきなり一日恋人になれなんて何か緊急事態でもあるとしか思えない…

「ちょっと前にあるパーティーである人に気に入られちゃってお見合いを申し込まれているのよ」

なるほどね、こいつの性格を知らないから、そんなこと言えるんだろうな。

「じゃあ、いつもの調子で、はあ？きもい！死ね！これで相手の心は、ズタズタになること間違いない！」

麗奈に向けビシッと親指を立てた。

「私いつもそこまで言っていないわよ！」

そうだな。言い過ぎた。死ね！の部分だけ撤回しておこう。

「それに、私を気に入ったのは、あの半田自動車の跡取り息子、半田宗一郎（ただそのうち半田）なのよ！」

「は？うそ？」

「うそついてどうすんのよ？」

半田自動車といえば日本の中でもかなり有名な自動車会社で、おそらく知らない人は、いないだろう。

「で、それが何で俺に1日恋人になれってことになるんだ？」

「半田自動車といえればかなり大きな会社でしょ？その跡取り息子とお見合いを何の理由もなく断ったら半田の跡取りを否定することになる、北条グループとしてもそれは避けたいのよ、だから私に彼氏がいるってことにして断わろうとしてるわけ。」

俺はこの状況を避けたいっての！大体、行動じゃなく言葉で伝えれば、いいだろうが！

「あらかじめ言うておくけど彼氏がいるって言ったのに本当にいるか確かめたいと宗一郎さんが言うてきたからあんたに仕方なく頼んでるんだからね。」

仕方なくっていうぐらいなら頼むなよ！あ、そういえば何で俺なんだ？

「ていうか何でお前、その彼氏役、当たり前のように俺なの？」

俺が、そう言うつと麗奈は、鋭い視線でこっちを睨んできた

「何？嫌なわけ？」

「い、いや、そういうわくじゃないけど。」

「じゃあ、どういうわけなのよ？」

なんか知らないけど怒ってるな！まずあの怒りを沈めるのが最優先事項だ。

「いや、俺なんかでいいのかなと思って…」

「何？そんなこと気にしてたの？ってというか家の両親が…」

『困ったな！半田からの見合いの話となれば、無下には断れんぞ。』

『そうだ、あなた！海斗くんは麗奈の彼氏役をやってもらいましょ。そしてゆくゆくは本物の彼氏に…うふふ！』

『そうだな！それがいい。麗奈、海斗くんは彼氏役を頼みなさい。後、海斗くんが本物に彼氏になったときにはちゃんと報告するんだよ。父さんにも心の準備が、いるからな』

「って言ってたからあんたしかいないの！」

俊樹としきさんと蛸ほたるさんか。麗奈の両親のあの2人とは、俺が小学校の頃から麗奈の家に遊びに行つてよく知っていたので、今の場面が頭の中で簡単に想像することができてしまった。

親が了承するどころか、その親が進めているわけか。しかしよく考えて見たら麗奈は、下手をしたら好きでもない人と結婚をすることになる。

それってあんまりにもかわいそうなんじゃないか？俺は心を決めた。

「よし！俺も男だ。今日1日俺はお前の恋人だ。」

「う…うん…ありがと。」

おい！自分で頼んどいて何顔赤くしてんだよ！こっちのほうで恥ずかしいっての。

俺に背を向け大きな深呼吸をした麗奈が、俺のほうを見ると何かを決意した表情で、こう言った。

「とりあえず向かうべきは本屋ね。行くわよ！」

俺は、なぜ本屋なのか、わけのわからないまま麗奈と一緒に喫茶店を後にした。

喫茶店では、ほとんど(後書き)

読んで頂きありがとうございます。評価、感想など頂けたら嬉しいです。

## 本に頼るのは、ほぼほぼ」

あの後、喫茶店を出た俺たちは、麗奈の

「まずは本屋ね！」の一言で、近くの本屋へと向かっていた。本屋に行く理由がわからない俺はそれとなく質問してみた。

「なあなんで本屋に行くんだ？半田さんに会いに行くんだろ？」

「別に会いになんか行かないわよ。」

「会いに行かないって…今から半田さんに会って俺が麗奈の彼氏です！って宣言するんじゃないの？」

「違うわよ！」

違うって、じゃあ、どうすんだよ。会わずに俺が麗奈の彼氏だと半田さんに伝える方法…わからん。

「じゃあ、どうやって俺がお前の彼氏だって認めさせるんだよ？」

「いい？半田さんは、こう言ったの。『僕は、実際会わずにその彼氏とやらが本物かどうか確かめてやる』ってね。」

「え？それってどういうこと？」

あんだ、まだわからないの？本物のバカ？といった表情で麗奈が俺を睨んでくる。

「だから、私たちがデートして、まるで付き合ってるように振る舞うのよ！」

「いや、2人で、デートしたって誰も見てないんじゃない意味…あ、まさか…」

半田さんが俺たちを監視する？本当に付き合ってるかどうか。いや、まさかな。あの半田自動車の跡取り息子が、そんなストーリーカーじみたことするはずが…

「やっとわかったようね！このデートは常に半田さんに監視されていると思いなさい。1つのミスも許されないのよ！わかった？」

「あ、ああ！とりあえずわかったけど、わからないこともある。何で本屋なんだ？」

多少回り道してしまっただが俺は、これが聞きたかったんだ、なぜ本屋なのかということ。

「…あ、あんた…初めて……ないの？」

麗奈は、急に歩くのをやめるとうつむき、何か小さい声で呟いている。

「いや、何言ってるかわかんないけど」

「……んた……めてじゃないの？」

またか。そんなに言いにくいことだったら、もういいや。何を言おうとしてたのかは気になるけど、無理に言わせようとしたら、ろく

なことがない。

「もういい、言いくいなら言わなくても。」

「まったく麗奈が美人っただけでも男達からの嫉妬の視線を感じるのに万が一、ここで麗奈と何かあつたら間違いないく俺が悪者にされ、男どもの視線が嫉妬から殺意に変わるのは確実だ。」

俺が麗奈の前を歩きだそうとしたとき急に後ろから、強い力で腕を掴まれた。振り返ると腕を掴んでいたのは、予想通り麗奈だった。その表情には、いつもの凜々しさはなく、少し、怯えるような、そんなふうには俺には見えた。

「あんた、デートとか初めてじゃないの？」

「はあ？なに言ってるの？と言いつつになつたがやめておいた。麗奈が深刻そうな表情をしていたからだ。俺は、おもいきり言つてやりたかつた。」

「小学校2年の時にこの街に引っ越してきてから約10年、今の今まで！」

「いや今、現在も俺はお前に振り回され続けている。結論。今までそんな暇は無かつた。そういうことになる。」

「いや、デートというか、俺、お前以外の女の子と2人で、出かけたことないし……」

「そ、そう。なら丁度いいわ。ほら、私もデートなんて初めてだから、本屋に行ってデートのしかたについての本なんか、買おうと思つて……文句ないわよね？」

「はい…」

いつのまにか、いつもの調子を取り戻していた麗奈に睨まれ、俺は有無も言わず同意させられていた。

本屋に着いた俺たちは、他のコーナーには目もくれず、恋愛関係の本が、置いてありそうなコーナーへと向かった。

「うーん、こんなにあるなんて…どの本にしたらいいのか迷うわね？」

「あ、ああ」

俺たちは、それらしい本が置いてあるコーナーには来たが、種類がありすぎて買う本を決められないでいた。そんなとき、俺は見えてはいけない物を見てしまった。

『もしも好きでもない人に告白されて断りにくくて幼馴染みとか（男友達）に一時的に彼氏になってもらい、見せつけて断ろうと思っただけで、デートのしかたが、わかんない！そんなあなたの為の本』

危ない！俺はとっさにこの本を取り、背中後ろに素早く隠した。  
ふうー…まさしく俺たちの為にあるような本だった。

大体、あんな今、この状況にぴったり！なんて本が、あるか？いや、ない！おそらく、この本が置いてある本屋は日本、いや世界を探してもここだけだろう。

「ちょっと、まじめに探さないよ」

「あ、ああ」

この動揺を悟られるな、見つかったら終わりだ。俺の勘だが麗奈は、この本を見たら、これしかないわ！とか言って迷わず買いそうな気がする。少し人とは、ずれてるところがあるもんな！本人には、口が裂けても言えないけど……

「ねえ、海斗？あんた後ろに何か隠してない？」

するどいいい！！お前は、シャーロック・ホームズか？そっちが、その気なら俺は、意地でも隠し通してみせる。じっちゃんの名にかけて！

「いや、何にも隠してな……」

睨んでいる。またか、今まで何度も、この無言の圧力に負けてきたか……だが、今日の俺は、違う！じっちゃんの名にかけて！

「……………」

俺も、麗奈を睨むという反撃にでた。

「な？反抗？上等じゃない。」

反抗？って俺はペットか、負けんぞ、今回は勝ってみせる！

10秒後……………

「…渡しなさい！」

「……………」

まだだ。まだ、耐えられる！

さらに10秒後…

「…………よこせ！」

まだ渡さない！じっちゃんの名にかけ…るのはもうやめよう。もう限界だよ！ごめん、じっちゃん…

「はい…」

俺は、あの怪し過ぎる本を麗奈に差し出した。

「……………」

あれ？気に入らない？やった！さすがにちょっとずれているとは言え、あの本は…

「いいじゃない！この本に決まりね。まさに私たちの為のある本みたいじゃない」

だから嫌なんだよ！…無駄か…もう、あきらめよう！気に入った本を見つけ、機嫌よくレジに向かう麗奈の後ろ姿を見ながら大きなため息をついた。

「早く来なさい！この本、買ったから！」

「今、行くよ！」

俺は、レジで会計を済ましている麗奈を見て確信した。あの本は、  
かならず、トラブルを呼ぶ！そっだ！今回は自信をもって言える。

じっちゃんの名にかけて！！

本に頼るのは、ほんとに（後書き）

評価、感想など頂けたら嬉しいです。読んで頂きありがとうございます。

## デートは、ほやほや!!

あの後、これからのデートのために本を見ながら、ハンバーガーショップで昼食を食べていた。

「この本を参考にするんだよな？」

「当たり前でしょ！デートなんて初めてなんだから、本でも見なきゃわかんないじゃないの！」

結局の所、やはり、麗奈が選んだ本を全面的に信用し、デートをすることになった。

まあ、仕方ないけどな…

とりあえず定番だが、まず映画館に行くことにした。

ハンバーガーショップを出て、映画館に向かう途中、俺はあの本の1つ目の試練が頭に浮かんだ。

1. 歩くときは、肩に手をかける！とまでは、言わないが最低、手は繋ぐ！

しよっぱなから、きついなあ！女の子と手を繋いだことなんてほとんどない。子供の頃、自然に麗奈と数回だけ…それもお互い、ある程度、大きくなってからは、そのようなことは、していない。すなわち、タイミングが、つかめない。

大体、麗奈もあの本を見て当然、手を繋ぐ！ということも知っているわけであって、あとは、俺のタイミング次第ってわけだ…

ああ、緊張する。だってそうだろ？いくら幼馴染みで俺への扱いが、ひどいと言ったって学校1の美人で、しかも無言でさっきからチラチラこっち見てるし…  
まるで

「ねえ、早く手を繋がないの？」と催促されてるみたいで、さらに緊張する！ああ、どうしたらいいんだあ！俺が、そんな考えを巡らせているとふと、麗奈が立ち止まった。  
「ど、どうした」

緊張で鼓動が速くなっているのを気付かれないようにおそるおそる聞いた。

「……………」

麗奈は何も言わず手を差し出してきた。俺は一瞬、呆気にとられたが、すぐ覚悟を決めて麗奈の手を掴み、手を繋いだ。

「あ…」

自分から、手を差し出してきた麗奈だか、おそらく麗奈も緊張していたのだろう、手を繋いだ瞬間、麗奈の口から小さい声が漏れた。とりあえず、手を繋ぐことは、成功したけど…麗奈の手は小さくてとても綺麗で繋いでいて心地よく、そのせいか、俺はドキドキしていた。

「海斗、やっぱり男ね！私より全然、手が大きい…それに何か、凄く安心するし、それに…ドキドキするわ…」

「お、俺も、緊張する。だって麗奈、…物凄く綺麗だし！」

「え…あ、ありがと！」

満面の笑みを浮かべながら、更に手を強く握ってくる麗奈に、麗奈の手が綺麗って言おうとして間違えて麗奈が綺麗だって言っちゃったんだ！とは言えるはずもなく、恥ずかしさを感じながら、映画館へと再び歩きだした。

駅前から、そう遠く離れていない大きな映画館に入った俺と麗奈は一応、公開されている映画を確認することにした。

アニメが2本、アクションが3本、ホラーが2本にラブストーリーが1本だった。

2・基本、映画は、ラブストーリーを見とけ！

あの本によれば、ラブストーリーを見とけばとりあえず、ハズレはないらしい。

「まあ、あの本にも書いてあったし、ラブストーリーでいいよな！…ん？」

俺は重要なことに気付いてしまった。映画館に入ってもまだ、手を繋いだままだということに。俺たち以外で映画館の中で手を繋いでいるカップルはいない！それどころか周囲の人達から、あの2人バカップル？というような視線を感じる。

「そうね！あれでいいわ…ていうか、海斗あんたさっきから何、まわりをキョロキョロ見てるのよ？」

おそらく、次第に手を繋ぐのにも慣れていったのだろう。麗奈は、まだ気付いていないようだった。

「なあ？映画館の中で手を繋ぐって結構恥ずかしくないか？」

俺に言われ、ようやく周囲からの視線に気付いたのか、頬を赤く染めながらこう答えた。

「そうね、さすがにここでは、やめといた方が、いいみたいね」

俺たちはようやく繋いでいた手を離れた。

予想通り映画は、まさに王道のラブストーリーという感じだった。ベタと言えばベタだが、これはこれで結構面白かった。

映画を見終わった帰り道、そのまま映画館を出ようとしたら麗奈に手を掴まれた。

「何だよ！急に？」

「もう、忘れたの？手を繋ぐんでしょ！」

あ！そうだった。なんか麗奈の奴、やたらと手を繋ぐのに慣れてきやがったな。俺は、全然慣れてねえのに…

「じゃあ、これからどうする？もう夕方だし、帰るか？」

まだ暗くは、なってないものの既に日は落ちかかっているし、これから、何処かに行くという選択肢は、明らかに無いと思う。

「そうね、とりあえず家の方向に向かって帰りながらブラブラするわよ」

「ブラブラって寄り道するってこと?」

「まあ、そんなところよ!」

「ふーん」

ちなみに俺と麗奈の家は、歩いて5分、走って2分のところであり、はつきり言っただけかなり近所になる。よって帰り道も最後までほぼ一緒ということになる。

しばらく歩きながら俺たちは、さっき見た映画の話をしていた。

「本当、鈍感だったわね。あの主人公!あれじゃあ、ヒロインが可哀想だわ!あれだけアプローチしてたのに。」

「そうか?俺には、そうは見えなかったぞ!結局、最後になるまでヒロインが、主人公を好きだったなんてわからなかったし、ていうかわかりづらいんだ!イタタタ!!!!」

急に繋いでいる手に力を入れてきた麗奈は、信じられない!といった表情で俺を睨んでいる。

「いてえな…何だよ?」

「……………鈍感……………」

「何？聞こえねえよ？」

「もう、いいわよー！」

麗奈は、そう言つと繋いでいた手を振りほどき、1人で先に歩きだしていった。

「ここ、寄ってくわよー！」

麗奈が、不機嫌モードのまま、入っていったのは、俺と麗奈が子供の頃、よく遊んでいた桜ヶ丘公園だった。

麗奈が、公園のベンチに座ったので俺もすぐに隣に座った。

いきなり何だよ？映画の話で何であんなにむきになる必要があるんだよ？なにか怒らせるようなこと言つてわけでもないのに……

「……………」

「……………」

やっぱり起こつてるんじゃない？後々の事を考えたら謝つたほうが……

「ねえ、あの本の書いてあった、次にやるべきこと覚えてる？」

あれ？怒つてないのか。さっきは俺の考え過ぎ？まあいい！えーとたしか次にやるべきことは……何だっけ？……

あ！たしか、

「思い出に残ることをするべし！だろ」

でも、何するの？とは思っけどな。

「そう、それでね、その思い出に残ること私が決めてもいい？」

「ああ、いいよ。」

どうぞー！どうぞー！だって俺じゃあ何も思い浮かばないからな。

「じゃあ、い、言うわね…」

「どうぞー！」

「その前に1つ質問があるわ…海斗、ファ、ファーストキ…キスっ  
てもうした？」

「え？ファ、ファーストキス？」

「そう、ファーストキス！」

「え？そりゃあ、したことないけど…」

何で、急にファーストキスの事なんて聞くんだよ？たぶん俺、今、  
顔真っ赤だよ！ああ、恥ずかしい。

「ふーん、そうなの…実は私もそのファア、…ファーストキスはま  
だなのよ。だから…」

何でお互い、こんな報告しなくちゃいけないんだよ…お互い顔真っ  
赤じゃねえか！

「だから何？」

「まだ、わかんないの？」

麗奈が、俺の方を向くが、顔が赤いため、睨んでるのが、見つめるのかわからなかった。たぶん…睨んでいると思う。

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が、続くと麗奈がはっきりとした口調で言った。

「思い出に…思い出にキスしようって言ってんの！」

えええええ？キス？そ、それは、まずいだろ…本当に付き合ってるわけでもないし…

「で、でも…」

「私に好きでもない人と結婚しろって言うのね！」

俺の言葉は麗奈に遮られた。確かに好きでもない人と結婚するのは、可哀想だけど、好きでもない人とキスは、いいのか？

「いい？私の事を思うんなら、キスしなさい！いいわね？」

そう言って麗奈は俺の目の前で目を閉じた。

「い、いいのか？」

俺は最終確認をした。それぐらい大切な物だと思ったからだ。

「何度も言わせないで！これ以上、女の私に恥かかす気？」

麗奈の今の一言で、とうとう俺は、覚悟を決めた。

落ち着け！落ち着け！俺は、必死に冷静になろうとするが、それは無理だった。今から、俺がキスする麗奈の唇は、とても綺麗で可愛らしくとても美しかった。俺は、ようやく麗奈の肩を掴んだ。その瞬間、麗奈の体に少し力が入った。恐らく緊張していたのだろう。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫よ！」

俺は、緊張している麗奈を見て、かわいい！キスしたい！と思った。そして麗奈の綺麗な唇に自分の唇を重ねた。麗奈の唇は想像どおり、とても柔らかかった。どれくらい経ったのだろうか？ようやくキスを終えた俺たちは、まだベンチに座ったままだ。

「……………」

「……………」

「どうだった？」

麗奈が、恥ずかしそうに口を開いた。

「柔らかかった。」

俺は正直に答えた。だって、しょうがないだろう！これが、素直な感想だったんだから。

「…バカ…」

俺たちは、しばらくして公園を後にして家へと帰った。帰り道、俺と麗奈の会話が、いつもより少なかったのは言うまでもない。

## おしゃべりは、ほどほどに

あれから麗奈を家まで送った後、すぐに家へと帰った。

「ただいまー！」

「おかえり！海斗。」

「母さん、飯は？」

「すぐ出来るから座って待ってなさい。」

「了解！」

俺は、テーブルのいつもの席に着いた。しばらくすると母さんの作った料理が、テーブルに並び、隣に舞がやってきた。

「海斗さあ、今日、麗姉とどうだったの？」

「ゴホッ…ゴホッ！」

俺は、今日の事を思いだし、咳き込んでしまった。俺と麗奈が、2人で出かけることは、そう珍しいことじゃないはず…なんで舞の奴、いつもは、そんなこと聞かないのに今日に限って聞いてくるんだよ？

「あら？麗奈ちゃんと何かあったの？」

追い討ちをかけるように母さんが質問してくる。

「べ、別に俺と麗奈が出かけることなんて珍しくもなんとも無いだろ！」

「ふーん…そう。」

舞の奴、信じてねえなあ…こっぴなったら、

「じっそうさまー！」

急いで残りの夕飯を食べて俺は、その場から逃げだすことにした。

「あら、逃げちゃって、わかりやすいわね。でも舞、どうして麗奈ちゃんと海斗に何かあったってわかったの？」

「そりゃあ、わかるわよ。だって海斗が、帰ってくる少し前に麗姉からのメールがね…」

「何て来たの？」

「それが私が『今日、海斗と出かけたんだよね？』ってメールしたら、『そうよ、出かけたんだけど、本当、海斗って全然度胸ないしアホでバカなのよね…それに少し…エッチだし…今日は本当、困ったわよ！』だって！」

「何か、あつたわね！海斗と麗奈ちゃん。」

「でしょ！でしょ！本当、わかりやすいよね！」

「2人は、やっと大人の階段を上り始めたのよ。温かく見守ってあげましょうね！舞。」

「はい」

.....

ふうー！危なかった。あのままあの場所に居たら今も質問攻めだったろうな。

舞と母さんから逃げてきた俺は自分の部屋のベッドに寝転がっていると携帯が鳴った。

「くくく」

着信は麗奈からだった。

「もしもし！」

「もしもし！私。」

「ああ、どうしたんだ？何か用か？」

「そうよ、半田さんのことだけど...」

そういえば、俺と麗奈がデートをしたのは、麗奈に彼氏が居ることを半田さんに見せつけ、麗奈にお見合いをさせないのが目的だった

な。

「で、結局どうなったんだ？」

「……………」

麗奈は黙っている……まさか……

「お前、半田さんと……」

「そう、結婚するの。やっぱり偽物の恋人だっただけなの。だから……」

「……………」

俺は言葉を失っていた。こんな時、どんなふうに声を掛ければいいのか、わからなかった。

「……………」

「……………クスッ！アハハ！」

何で、こんな状況になって笑えるんだよ？まさか現実逃避？

「アハハ！嘘よ！嘘！」

「はあ？嘘？」

「そうよ、半田さんは私に彼氏が居ることはわかったから、身を引くって言った」

「なんだ…よかった！っていうか何で嘘ついたんだよ？」

今の状況で嘘つく必要無いでだろ？まったく！

「別に！私が結婚するって言ったら、あんたがどんな反応するかと思ってる」

いや、反応って話の成り行きからして喜ぶことはまずないだろ！

「どうだった？お前のお望みの反応だった？」

「まあまあだったわ！」

基準は何なんだよ！俺は心の中でツッコミをいれた。

「ところで海斗、そ、その明日からの学校だけど！キ、キスしたからって変に意識しないでいつも通りに過ごすのよ…ほら、あのキスだって仕方なかったんだし…」

さっきまでとは違い麗奈の声は少し齒切れが悪かった。

麗奈の奴、いきなり学校の話してきたけど…やっぱりキスしたこと意識してんのかな…ここは麗奈の言うとおり無理にでも意識しないようにする方が俺自身のためだな。

「ああ、わかってるよ。もしなんかの拍子に俺と麗奈が、キスしたことがばれたら、ほかの男共に何されるかわからん…それに俺だって彼女、欲しいしな！…？」

「……………」

あれ？携帯越しなのにこのひしひしと伝わってくるオーラは…麗奈が怒ってる？

「へえー彼女ねえ！へえー彼女かあ……彼女欲しいんだ？」

欲しい！けど…

「欲しくくないです」

負けた！欲しいって言いたかったけど…無理だ。

「へえーじゃあ、さっき言ったのは？」

「出来心です。」

「ふーん…まあいいわ。海斗、あんた明日の朝、覚えときなさい！」

ツーツーツー…

一方的に切られたか…また麗奈の機嫌を悪くしてしまった。憂鬱だ。

「海斗ー！お風呂入りなさい。」

「はいよー…」

俺は憂鬱な気分のまま風呂へと向かった。

## ローキックは、ほどほどに

俺は今自分のクラス、つまり1年B組の教室にいる。

「ふあ〜」

思わずあくびがでちまったが、こればかりはしょうがない。何たって眠い！非常に眠い。くっ、やっぱり睡魔には勝てないか…寝よう。

「なに寝ようとしてんの？さっきから、あくびばかりしてだらしないわね！」

そういつて話かけてきたのは隣の席に座っている麗奈だ。北条と三上、まだ学校が始まって1ヶ月なのでいまだ出席番号順の席ということになっていっている。っていうかこいつよくそんなことが言えるな。お前が元凶のくせに…

「お前が言うな！朝5時に俺の部屋に入ってきたと思ったらいきなり俺を叩き起こして『勉強するわよ』って、朝5時に勉強する奴が、この世界のどこに居るんだよ？」

「バカねあんたは！朝に勉強するとよく覚えられるのよ。」

「それは、ちょうど今くらいの時間を言うんだよ！朝5時にやったことなんてもう頭の片隅にも残ってないわ！」

「知らないわよ！そんなの。大体あんたが昨日…」

「そっ、ひるちいぞー！」

「……………」

「……………」

俺たち、1年B組の担任である高橋先生の注意により、俺と麗奈は、言い争うのをやめた。

「よし！静かになったな。朝のホームルームはこれで終わりにする以上。」

そう言うと高橋先生は教室を出ていった。

「あんたのせいで怒られたのよ！最悪！」

こっちのセリフだああ！と言ってやろうとしたがやめておいた。眠くてそんな気力は、もう残ってない…そんなとき俺の後ろの席に座る一応親友の隆が話しかけてきた。

「なあ海斗、まさかとは思うが、この連休のうちに彼女が出来たなんてことは…」

「ないわ！」

何で麗奈が、答えるんだよ！まあ、でも当たったるか…

「そうか！そうか！残念だったな。」

「そういつお前は、この連休中に彼女できたのかよ？隆？」

「それもないわ！」

だから、何でお前が…あれ？隆、うなだれてる？やっぱ当たってるのか。

「隆、残念だったな。」

「お前もな」

俺たちは同じ気持ちを共有させ、がっちりと握手をかわした。

「あんた達なに握手してんの？」

そういつて俺たちの前に来たのが麗奈の小学校時代からの親友の黒<sup>く</sup>田美咲<sup>ろたみさき</sup>だ。というわけで俺も昔から知っていてそれなりに仲もいい。少し男っぽいところもあるが、黙っていれば、かなりの美人だ。

「こいつらモテないどうし慰めあってるのよ」

「ふーん、かわいそう」

くそっ！言い返したいけど言い返せない…隆が何とも言えない寂しい表情をしている。お前も同じ気持ちなんだな。俺は隆の肩をポンポンと叩いた。

「諦めるな！諦めなければ日は必ず昇る。」

「……ああ、そうだな」

麗奈と美咲の冷たい視線を感じるが、そんなことは関係ない。その後も俺たちは互いを慰めあった。

「おい、席に着けよ。授業始めるぞ！」

授業が始まる時間になり数学の先生が教室に入ってきた。

「あつ！じゃあ私、自分の席戻るわ。」

そういつて美咲は自分の席へと戻っていった。

.....

1 . 2 . 3 . と午前の授業が終わり昼休みの時間になった。

「海斗！早く弁当食いに行こうぜ」

後ろからやけに大きな隆の声がする。どうやら朝の事から立ち直ったようだ。3時間目の途中までは、頭を下げ、机にダウンしていたのにな……

「よし、行きますか。」

俺は、隣に座っている麗奈の行動を待つ。

「美咲、行こう！」

「そうね」

麗奈の一言で俺たちは動きだす。なぜかと言うとミス紅高に選ばれ

た麗奈は、なんの権限かは、知らないが第3視聴覚室の部屋の鍵を持っている。

簡単に言えば、他の生徒が入れない部屋にミス紅高の権限で入るというわけで、おかげで誰にも邪魔されずに昼飯を食べることができる。

麗奈が第3視聴覚室の鍵を開けて俺たちは部屋に入り、さっそく弁当を食べ始めた。

「なあ、さっき俺たちのこと哀れな目で見てたけど、お前らは彼氏いるのかよ」

バカアアアア！！なんてこと聞くんた。隆、お前は命が惜しくないのか？

「い、いないけど」

先に麗奈が答えた。

「私も、いないわ。」

その次に美咲が答えた。

「なんだ、俺たちと一緒にじゃないか！なあ、海斗」

俺を巻き込むな！ここは当たり障りの無いことを言っておこう。

「そうか、俺たちとは違うんじゃないか！」

麗奈と美咲の視線が一気に俺に集まる。

「はい？俺たちと、どう違うんだよ？」

こいつ、まだ自分がどっちに向かっていったか、気付いていないよいな…

俺は麗奈と美咲の期待する視線を感じながら導きだした答えを言った。

「麗奈と美咲は…いないんじゃないかなんだよ…」

「そ、そうよ！好きで作らないの勘違いしないでよ！」

麗奈がそう言うと美咲も、その通りと言わんばかりの顔をしていた。

「ハハッ！そんなこと言ったらいつまでたつても…ぐほお！…」

麗奈のローキックが見事に隆の足に直撃した。あれだけ俺が危険！というサインを送ったのに哀れな奴め…

「この学校で、私たちのこと、ここまでバカに出来るのは、隆と海斗だけね。」

そう言うと麗奈は俺の方を睨みつけてきた。

「本当、そうよね！」

美咲も同じく睨んでいる。

え？俺も？いや、俺悪くないでしょ…

「あの、僕も悪いんでしょうか？」

「連帯責任！」

麗奈のはつきりとした声に俺は床に倒れている隆と同じ運命なんだと覚悟した。その時、

ピンポンパンポン！

「1年B組の三上海斗君、至急、第2資料室に来てください！」

キター！！これ以上ない最高のタイミングだ。

俺は2人を交互に見た。

「し、しかたないわ、早く行ってきなさい！」

「今回は、許してあげるわ」

「ありがとうございます！」

俺は、ものすごい勢いで第3視聴覚室を出て第2資料室へと向かった。：しばらくして俺は重大な事に気付いてた。第2資料室ってどこだっけ？

## ローキックは、ほどほどに（後書き）

評価、感想など頂けると嬉しいです！読んで頂き本当にありがとうございます。

ピッキングは、ほんとに

思ったよりも学校の校舎は広く、さんざん迷ったあげく、ようやく俺は第2資料室の前に着いた。

コンコン！

ガラッ！

「失礼します。さっき呼び出された1年B組の三上海斗です。」

俺は部屋に入ると辺りを見回した。そこには、俺を呼びだしたはずの先生はおらず1人の女の子が立っていた。あれ？この人も呼び出されたのか？

「あなたが、三上海斗ね。初めまして！私の事は、言わなくてもわかるわよね！」

そんなこと急に言われたって…知るはずもない…綺麗な瞳に長い黒髪、スタイルもよくなるの美少女。こんな娘に会って忘れてはならない。結果、俺は初対面だという結論に達した。

「いや…初めてだとおも…」

「……………」

目の前にいる彼女は信じられないといった表情で俺を睨んでいる。

「……………」

「……………」

何だよ。この沈黙は…思い出せってか、無理だつて！絶対知らねえもん。

「言っとくけど思い出すの待ってるんだったら、はっきり言っただけだ。」

「はあー！」

彼女は呆れたように大きなため息をつくと言った様子で口を開いた。

「私の名前は、高坂紅羽こうさかくれはよ。ちなみにこの学校の理事長の娘よ。」

理事長の娘？そっすえば美咲が、

「今年、私たちと同じ学年で理事長の娘が入ってくるわしいわよ！  
って言っただよな気がする…美咲の奴、学校のことなら大体知ってるからな！親友の麗奈でさえどうやって情報集めてるかわからな  
いって言っただよな。」

…だけだよっぱり会った覚えがない…

「えーと高坂。悪いけど、やっぱりどこで会ったか、いまい思い出せないんだが」

「本当に覚えてないの！信じられないわ！」

いや、だから覚えて無いつて言っただよな！麗奈といい高坂とい俺のまわりの美人は何かしら性格が変わった奴ばっかだな。

「っていつか人違いじゃないのか？さっきから言っよつた！」

「人違いなんかじゃないわよ！」

高坂が俺の言葉を勢いよく遮る。

「……………」

そんなこと言われたって覚えてないものは覚えてないし…

「なあ、俺と高坂はどこで会ったんだ？」

最初から、こつ聞いておけば良かったかもしれない。

まあ聞ける雰囲気じゃなかったけど…

「…ミスコンよ！あの時、私も出てたじゃない。」

「ミスコン？えつと…あつ、思いだした。確か、最後に麗奈に負けて2位だったんだよな。」

「いちいち負けたって言うなああ！」

負けたことかなり気にしてるな。まあプライド高そうだし、一応フオローしておこう。

「何だよ、負けたって言っても最後まで残ったんだから高坂は凄いつて！」

「そ、そうかしら」

おっ！乗ってきたな！あと一息。

「そうだって、大体麗奈に勝てるわけないだろ？」

そう、俺が言った瞬間、高坂は再び、怒りの表情を見せた。

「何ですって！私が北条麗奈に勝てない？そうね、確かにミスコンでは負けたわ。屈辱だった、28年間破られていなかった1年生でのミス紅高の称号。それをあろうことか、私以外の人が受賞してしまうなんて…でも、それはまぐれ！私は2度は負けないわ！そして私が1番だってことを北条麗奈に見せつけてやるわ！」

うわ！めんどくせえ！素直にそう思った。それに何か、自分を1番だと勘違いしてる痛い奴だし…あれこれ言わずに関わるのは、もうやめよう。

「そうだな、存分に見せつけてくれ！あと見せつけるなら、俺じゃなく麗奈を呼んでくれ！俺は、関係無いだろう！」

「何言ってるのよ。三上海斗！北条麗奈に勝つには、まずあなたを利用させてもらおうわ。」

利用？ということとは、麗奈を騙したり闇討ちするってことか…できない！たとえ内閣総理大臣の命だとしてもだ。返り討ちにあうどころか殺されるのが、オチだ。

「無理！無理！無理！」

俺は、首を横にふって必死に拒否した。

その様子を見て高坂が笑っている。  
う…なんか怖い！

「何か勘違いしてない？三上海斗」

そう言っつて高坂は、俺に近づいてきた。  
何企んでるんだこいつ？

「か、勘違いっつてどういうことだよ？」

「私は北条麗奈を倒せなんて命令しないわ。」

倒せつて…そのまんまだな。

「じゃあ、俺に何してほしいんだよ」

まあ何言われたつて聞く気なんかないけど！

「私の、彼氏になりなさい！命令よ！」

高坂の衝撃的な言葉に俺は、とっさに部屋を出ようとした。

ガチャガチャ！あれ？鍵が開かない…

「その鍵は、私が持つてるこのリモコンで開くようになってるのよ。さあ、もう一回言っつわ！三上海斗、私の彼氏になりなさい。」

ガチャガチャ…

ガチャガチャ…

開かない…

高坂の方を見ると、勝ち誇った邪悪な笑みをしている。ああ！戻りてえ！あの頃に戻りてえ！…そんなことを思いながら、これから、どうすれば、いいのかまったくわからない俺は、ひたすら開くはずがない鍵を開けようとした。

ガチャガチャ…

ガチャガチャ…

「無駄よ」

「はい」

俺は、このとき初めて自分にピッキングの才が無いことを悔やんだ。

## 姉妹は、ほどほどに

少し前まで俺は自分のピッキングの力量に賭け、鍵を開けようと試みていたが…今さっき自力で鍵を開けることを諦め、高坂と向かい合っている。

「なあ、1つ聞いていいか？」

「どうぞ！」

「高坂は麗奈に何らかの形で勝ちたいんだよな！だとしたら何のために俺と付き合ってることになるんだ？」

「はあ、何を言ってるのよ。北条麗奈とあなたは付き合ってるんでしょ？だから奪い取ってやるために決まってるじゃない。」

高坂が何の迷いもなく、はっきりした口調で言う。  
「うおおい！こいつ何か勘違いしてる。それもかなり激しく…何処で誰に聞いたかは知らないが、まったくのたらめだ。俺と麗奈は幼馴染みであってそれ以上でもそれ以下でもない。」

「いや、違うって！高坂は、何か勘違いしてるぞ。誰に聞いたかは知らないが、俺と麗奈はただの幼馴染みだ。」

「え、そうなの？私でっきり…」

俺の言葉に反応し、驚きの表情をみせる。

そんなに驚くことだろうか？高坂のこの反応を見るかぎり、学校の

中で勘違いしている奴は他にも居そうだ。

「あれ？でも、そういうことは……」

高坂は何かに気づいたようで手をポンと叩くながら何か呟いている。

「……付き合っただけで無いですよ……そういうことで……ということでは……まだ北条麗奈の……に気付いていない……わけでは……信じられない……」  
急にうつむき、俺に背を向けて1人の世界へと入ってしまった高坂は小さい声で何やら呟いている。何を言ってるのかは、わかんねえけど何か、嫌な予感は凄く感じる。

しばらくして1人の世界で呟くのを終えた高坂は振り向くと勢いよく俺に近づいてくる。

「まあ、事情が変わったけどいいわ。ほんの少し北条麗奈に同情するけど、そんなの関係ない。やっぱり私と付き合いなさい！三上海斗。」

事情が変わったってどこがだよ！振り出しに戻ってんじゃねえか！それに少しでも麗奈に同情するってどういう意味だよ？麗奈に同情する前に俺に同情してほしいわ！まったく！  
そんなことを考えているうちに高坂が追い討ちをかけてくる。

「ほら、付き合っただけで言いなさい！どっちみち逃げ場は無いんだから」

そう言うとフツツと笑いながら俺の肩に手をかけてくる。

「!!!!!!」

うっつ…めちやくちや近い!…げ、限界だ。

高坂の可憐ないい香りにドキドキしながら俺は必死に高坂から目をそらした。

「いつまでそうしてられるかしらね。まあいいわ。時間はたっぷりあるんだから!」

そういつて高坂は俺の頭を持って強引に自分の目線へとあわせた。

ドキドキ!ドキドキ!

ああ!理性が!俺よ、頑張れ…うっ、近くで見るとさらに高坂は綺麗だ。いかん…いかん、誰か助けてええええ!

ピッ!カチャ!

「何してんの?紅羽?」

突然後ろのドアの方から声が聞こえた。

あれ?開かない鍵のはずなのに誰か来た?俺はとっさに振り返り、ドアの方を見た。入ってきたのは、落ち着いた感じの大人の雰囲気のある美少女であった。気がつく和高坂が俺の肩に手をかけるのをやめ、あれだけ近かった距離も少し離れている。

「紅羽、ここで何をやっていたの?答えなさい!」

彼女は高坂にさらに追及を続ける。さつきとは、うって変わって大人しくうつむき黙っている高坂。

何だ？いきなり、ばつが悪そうな顔しやがって、一体どうしちまっただ。俺は、訳がわからず、高坂と見知らぬ彼女を交互に見る。俺の行動に気付いたのか、見知らぬ彼女が話しかけてきた

「ごめんなさいね、妹が迷惑かけて」

「いや、いいんで…ええええええ！！！！妹？」

そんな、妹って…俺は確認のため高坂の方を見た。俺の視線に気付いた高坂は黙って頷いた。

「私は紅羽の姉の高坂茜こうさかあかねよ！よろしくね」

「あ、どうも三上海斗です。こちらこそよろしくお願いします」

よし！大人しく冷静だ。この人ならこの状況を何とかしてくれそうだ。これでやっとこの部屋から解放される。

「さあ、紅羽！海斗くんに何をしていたか白状してもらおうよ！」

「……………」

高坂は、すっかりものの姉には弱いのか、それとも怖いのか、ひたすらうつむき黙っている。

ふん！まあいい自業自得だしな。

「あの、じゃあ姉妹でつもる話もあるだろうし俺はこのへんで失礼

します」

そういつた俺は、部屋を出ようとドアノブに手をかけた。

ピッ！ガチャ！

ガチャ？俺は耳を疑った。まさか…俺が振り返ると茜さんがリモコン片手に笑っていた。

「誰が、帰っていいって言ったの？」

「……………」

「さあ、海斗くんも紅羽の隣に来て！ほら早く！」

え？俺も？…

「いや、俺は被害者です……………」

「早くしなさい！」

「はい」

茜さんの強い口調にさからえず、俺はおとなしく高坂の隣に向かった。

「じゃあ、2人揃ったところで何があったのか話してちょうだい」



姉妹は、ほどほどに（後書き）

ご評価、感想など頂けたら嬉しいです。読みにくい所もあるかと思いますが、頑張りますので、これからもよろしくお願いします。読んで頂き本当にありがとうございます。

## 矛盾は、ほどほどに

俺は、この部屋での出来事を嘘偽りなく茜さんに話した。話を聞き終わると茜さんが俺たちに向かって口を開いた。

「なるほどね！話は大体わかったわ。聞いたところ、7：3で紅羽が悪いわね。」

7：3？何かおかしいような…

「あの、念のために聞きますけど、俺の3の内容を教えてくださいませんか？」

「秘密よ」

「……………」

いや、ちゃんとした理由を教えてくださいよ…と言おうとしたが、茜さんから出ている『秘密』って言ったら秘密よ。「オーラの前では、軽く流されてしまうだろうと思ったため言っても無駄だと確信し、潔く諦めた。」

「さて、「冗談はここまでにして本題に入るわよ！」

そう言うと茜さんは俺から隣にいる高坂に視線を移した。

…っというか冗談だったのかよ！

「……………」

相変わらず高坂は、うつむき黙っている。そこまで実の姉が怖いのか？おれがそんなことを考えていると茜さんが高坂に対して強い口調で言う。

「紅羽言ったわよね？明日香あすか姉さんのお見合いは、おかしいって！好きでもない人と結婚するのは間違ってるって！」

そう言う茜さんの表情は少し怒って見えた。

「……………」

高坂はまだ黙っている。

「言ったわよね？」

「…う、うん…」

消え入りそうな小さな声で高坂が呟いた。

ところで俺はというと全く話が掴めないどころか明日香さんという知らない人まで出てきて…『ちょっと待ってください！それはどういうことなんですか？』と口を挟むことも出来ず、2人のやりとりを黙ってただ見ているしかなかった。

「あ！海斗君はわからないよね。ごめん！ごめん！一応当事者だしね」

1人話が掴めず置いていかれていた俺にようやく茜さんが気付いてくれたみたいだ。  
でも、もし事情を知ってしまったら『聞いたわね！聞いたらもう後戻りは出来ないわよ！』みたいなことになるかもしれない…いや待てよ！俺は被害者なんだぞ。ここは何があっても断固として強気の態度に出よう。そう俺は心に決めた。

「あのね、うちの家ってここの学校もそうだけど何個か系列の学校を持つてるのよ。でも最近は経営があまり良くなかったの…そんなとき偶然にもある大財閥の息子が私たちの姉の明日香姉さんに一目惚れしたみたいでお見合いを申し込んできたの。私たちの両親も学校の経営が悪いことは気にすること無いって言ったんだけど…明日香姉さんは自分が犠牲になって結婚するって言いだしたたのよ…」  
なるほど！ようやく話を掴めた俺はこの2人と同じ土俵で話せる状態になった。

茜さんは言い終えると再び高坂に視線を向けた。

「あんなこと言って明日香姉さんを止めたくせに自分は好きでもない人と付き合っつていうの？」

「……………」

高坂は返す言葉がないらしい…そりゃあそうだろう。自分の姉さんに好きでもない人と結婚するのはおかしいと言っておいて自分は好きでもない人と付き合っつ！これじゃあ矛盾もいいとこだ。

「何とか言いなさい！紅羽。」

茜さんの声が部屋中に響き渡る。

「…わかったわ！姉さん…私、三上海斗と…っ、付き合っつのはやめるわ」

高坂の言葉に俺はホッと胸を撫で下ろした。

「海斗くん！妹が迷惑かけて本当にごめんなさい。ほら紅羽も謝りなさい。」

「い、い、ごめんなさい！」

茜さんに言われ高坂は素直に謝った。

「いや、もういいよ！これで一件落着いたわけだしな。あっ！それと茜さん！ありがとっございしました。」

「ちょっと！やめてよ！お礼なんか私たちが悪いのに。」

そんなことを話ながら俺はドアの前に来た。

「じゃあ！そろそろ俺はこれで！」

「あ！そうね。」

ピッ！ガチャ！

茜さんがリモコンで鍵を開けてくれた。

「ちょっと待って!」

もうすでにドアノブに手がかかっていた俺はふいに高坂に呼び止められた。

「な、何？」

「私と友達になってくれない？」

「友達？」

俺は、びっくりして聞き返してしまった。さっきまで付き合えと言っていたのに今度は友達？何か企んでるのか？

「私、学校で友達が全然いないのよ、だから良かったら…」

俺は高坂の後ろにいる茜さんを見た。茜さんはというとお願ひ!と体の前で手を合わせている。あの茜さんの様子を見ると高坂は純粹に友達が欲しいのだろう。

「ああ、俺で良かったら友達になるよ!」

俺がそう言つと高坂の表情がパツと明るくなり嬉しそうに笑った。

「うれしいわ!それと私たち友達になつたんだから高坂なんて名字で呼ぶのはやめて紅羽って読んで欲しいわ…私も三上海斗ではなく…海斗って呼ぶから。」

突然の申し出だったがとくに断る理由がなかった俺は抵抗なく受け入れた。

「わかった！じゃあ、高：紅羽またな！」

「ええ！またね！」

俺はそう言っつて第2資料室を後にした。

キーンコーンカーンコーン！！

「ハア、ハア、セーフ！」

結局昼休みの大半を第2資料室で過ごしてしまった俺は、午後の授業が始まる寸前に教室にすべりこみ自分の席に座ることに成功した。

「ずいぶん遅かったじゃない？一体何で呼ばれたのよ？」

そう言っつて話しかけてきたのは隣の席に座っている麗奈だ。

麗奈が俺に疑いの目を向けてくる。相変わらず鋭いな！

「ん？別にこれと言っつて大した用事じゃなかったけど！」

「そう、ならいいわ。」

この後、午後の授業が終わるまで麗奈が、この事を聞いてくることはなく何事もなく放課後を迎えた。

「海斗！帰るわよ！」

「了解！帰るか！」

ちなみに俺と麗奈は互いに用事があるとき以外は、必ずと言っていいほど一緒に帰っている。周りの男たちから嫉妬の視線を感じるが、幼馴染み！というポジションのおかげで俺は今も麗奈と2人で帰っていても無事でいられる。

俺はいつも通り校門を出ようとした時、見てはいけないものを見ってしまった。

紅羽が、校門のところで誰かを待ってる！もしかして…まさか…

「ねえ、あんた、どうしたの？急に浮かない顔してさ！」

俺の動揺に気付いたように麗奈が聞いてきた。

「いや、何でもない。」

俺は冷静を装い何のためらいもなく校門をくぐろうとした。

不覚にも紅羽と目が合ってしまった。

「あっ！海斗！」

紅羽が俺に気づいて駆け寄ってくる。  
やっぱり俺だったんだな…隣にいる麗奈は、駆け寄ってくる紅羽に  
驚きのまなざしを向けている。

とうとう紅羽が俺の目の前にきた。

「待ってたわよ！さあ一緒に帰りましょ！海斗。」

そう言って紅羽は俺の隣に並ぶ。

「……………」

俺は今まで何度も麗奈に睨まれてきたが、ここまで殺気を感じるの  
は初めてだった。

やばい！殺られる！！

そう直感で感じた！

お前はすでに死んでいる！

誰だあ！俺のことすでに死んでるって言った奴はあああ！……！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2957e/>

---

幼馴染みは予測不能

2010年10月11日01時40分発行